

同じく2015年の4月に、信州大学の学長が新入生へ向けての祝辞の中で、「スマホやめるか？信州大学やめるか？」と述べたニュースは記憶に新しい。都心にあるリンゴマークのショップは指も変わらず、新製品を求める人々で賑わっている。この爆発的人気の商品のデザイナーであり、創業者のアメリカ人は東洋の禪(ZEN)に傾倒し、永平寺で禪を組むなどの体験から、デザイン発想をしたといわれている。それは、極限まで余分を削ぎ落としたデザインだ。今では、老若男女が1日中、スマホを握りしめている光景は何の違和感もない。生きていくすべのあらゆる情報が、電源をONにすればそらい、世界中に繋がる。必要な時に必要な情報を取り出し、瞬時に解決することが出来るのだから、24時間、多くの人々にとって必要不可欠なものとなっているのは確かだ。だが、その反面、本当の感情というものを表出させ、人とコミュニケーションすることは難しくなっている。せっかく、多くの人々が因らずもその場にいるのに、皆自分の画面を見て、指を動かしている。単語を返信できても感情の奥深さは伝わらない。信州大学の学長祝辞の真意は「リアルな人との繋がりを！自分で考え、創り出せる言葉の大切さだ。必要なものを取り出し、終わればまた絶対的な無が訪れ、自然と向き合い、己と向き合う、そんな「禪」の精神を愛した人がスマートフォンの創業者なのである。「空」という「間」を知っていた彼はもうこの世にいない。

目まぐるしい変化の社会を生きる私達の感覚は、五感の偏りを生み出していることに気が付いているのに、誰もそれを止めることができない。画面越しに見ている文化が、ものすごい速度で、世界中を駆け抜けていく。私達の五感は一体どこへ行くのだろう。

文責：松田 純子

029.「思いつくままにいくつか〜」

① テーマは「共存共栄」このテキスタイル業界で長い間生きてこられたのは、産地の産元、紡績屋、後藤、加工場などがあつたおかげ。これからも産地が存続しなくてもいいと話してどうでないと後世に引き継ぐこともできない！そんな思いで、今改めて「産地との共存共栄」を、知恵を出し取り組んでいく必要があることを強く思います。

② YOUは何しに日本へ？今日本は、観光立国を目指していますが、外国人は日本らしいものを求めず、日本人が気づかない事や知らないことに意外と興味を持ちります。そのことは、外国の観光客が増えれば、日本人も今までとはまた違った見方が芽生え面白いものも生まれてくるのではないかと。

③ 沖縄LOVEリゾート目的でもありますが、紅型、久米島紬、ミンサー織、八重山上げなど布地文化が豊かなこと、独特の音楽が好きで毎年訪れています。昨年は、喜如嘉の芭蕉布を訪ねましたが、若い人が数人いて頑張っていました。聞くところによると、結構入門したい若者が来るようですが、沖縄の人を優先するとの事、それにしても、芭蕉を栽培する畑を耕すところから始めて、完成までの気の遠くなる長い製作工程は根気のいる仕事で、自分には無理と思ってしまうようです。

④ 田舎ですが、最後に、私が住んでいる「狭山〜川越エリア」のアピールで恐縮です。狭山は、日本三大茶の一つ「狭山茶」が有名で、茶畑が点在しています。5月は、新茶の季節、ほんとうに茶畑の緑がきれいです。川越は、情緒あるエリアがあって、近年観光客で大変賑わっています。着物が似合う街として、毎月18日は着物の日。着物を着ていると、いろいろなお割引やサービスが受けられます。特産の「川越唐棧」という細かいストライプ柄の綿織物で着こなすと粋！決して古さは感じずモダンなストライプです。さつまいもの産地で、おいしい老舗のうなぎ店も沢山ありますよ。都内から日帰り観光ができますので、息抜きに遊びにいかけてみてはいかがでしょうか。

文責：内田 滋

030.「TDAコラム」

大阪でテキスタイル企画事務所をはじめた30年。関西近辺の色々な産地で仕事をさせてもらいながら、未だに驚きと発見があり、話を聞き、現場を見るたびにワクワクする。何年仕事をしても益々繊維に触れることが楽しくなる。日本の繊維の伝統技術は歴史と共に長く、産地へ行きゆっくり話し込むと次々と語り継がれる深いもの語りが出て来る。歴史(れきじよ)としては、面白くて身を乗り出して聞いてしまう。そんなもの語りや伝統の技術も当事者達は普通の事として「みんな知ってる事やわ!」と言われるが、皆と言っても、「いやいや、それは地元だけで、今では全国版ではない時代ですよ!」と言うとがっかりされる。問屋、メーカーの流れの中で陰になっていた関西の山ほどある繊維のものづくり産地。麻、麻、綿、ウール素材を使用し、糸を織る、織る、織む、染める…地元で自慢の伝統技術は、近々の道の駅でひっそりと並んでいる。中心は、やはり食である。



食文化の見直しで、食育(しょくいく)が進み、子供達に料理人が話したり見せたりすると、驚きの眼差しで「へ〜」を連発すると言う。確かにスーパーマーケットに行けば、骨抜き魚の切り身がパックに入って並ぶ時代、考えればテキスタイル分野でも同じようだ。

若いデザイナーが、1300年の歴史ある絹織物、丹後ちりめんを「何それ?ちりめんじゃこですか?」と言ったとか…真綿(まわた)を綿(めん)と書くからコットンだと思っていた…とか、笑えない笑い話が山ほどある。嘆いてもしかたない。今こそ時代の流れ、農家へ行き家庭菜園を楽しんだり、お茶カフェで日本茶の入れ方を学び、味わう…

テキスタイルも布育(ぬのいく)で楽しむことが良いかもしれない。日本で育った茶(かいこ)から真綿をひく作業が、若い人に継がれている。閉鎖が深まった工場の職機を買い取り、技術を復活したいと挑戦する3代目がいる。藤の木を育て、古代から伝えられる糸づくりをし、藤布を織る親子がいる。まだまだ各地に伝えてくれる若者がいる。色々な産地が集まり、活動する「テキスタイルマルシェ」展。産地直送の販売会も何とから5年になる。大阪や東京の会場で開催の2代目、3代目の社長がいきいきと布や糸の説明をし、それをニコニコと楽しんで聞いているお客様がいる。これから、ゆっくり、じっくりと見直す楽しい時代のように思えてきた。

文責：朝比奈 由起子

031. International Fiber Recycling Symposium 2015 in San Francisco

6月8 -10日サンフランシスコ州立大学で、International Fiber Recycling Symposium が開催された。このシンポジウムは、英国・アメリカ・日本の研究者が中心となってつくられたもので、今回で5回目となる。産業と学術研究を融合して、持続可能な社会に向けて、循環できる素材としての繊維、そのあり方やリサイクル方法を探っていくものである。衣料・インテリア・産業資材等様々な分野で使われている繊維のリサイクルについて20余りの研究発表がおこなわれ、私も研究発表に参加した。企業の方の参加も多く、スイスに本社を持つ世界最大手のリサイクル企業アイコレクト社や、リーバース社、スピード社等からも参加があり、アメリカらしい自然した質問タイムとなった。

現在、日本では年間200万トンもの繊維廃材があり、そのうちリサイクルされているのはわずか2割、約8割が焼却等で処分されている。この現状はアメリカや他の先進国でも近い状況にあり、繊維のリサイクルは世界レベルで考えていくべき課題だと実感した。

また、シンポジウムに合わせて繊維リサイクルアイデアコンペティションも開かれ、日米両国の入賞作品から最優秀賞が選ばれた。一般部門はLing Zhang & Chanmi Hwang, Iowa State University (USA) タイトル:The Beauty of Gothic (2枚の皮ジャケットと16本のシルクネクタイからゴシック建築をイメージしたドレスの制作) まえかけ部門は Yoshiko Odamaki, Tokyo Kasei University (Japan)(アメリカに直接応募分) タイトル:Origami Apron(ふるしきを用いて折り紙技術でエプロンを制作) 一般部門での優秀賞は廃棄されたネクタイを使って重量につり込んだドレスが圧巻だった。また、まえかけ部門では1mmの無駄もな折り紙技法を使った作品は日本の洗練された美しさを感じた。

文責：内丸もと子

032. TDAの会員が参加した国際展と交流活動

TDAはデザインを中心として日本の繊維産業と繊維文化の発展に貢献する団体として創立され活動していることに刺激を受け、2011年に入会致しました。最初企業へ就職しましたが、その後大学教育に参与するようになりました。現在、倉敷において繊維産業と関わりながら、教育を基盤として活動しています。倉敷児島の繊維関連企業の方と関わる機会も多く、産地からのからの発信として、デザインだけでなく、アートや日本の伝統染織と融合しながら、広く生産に関わることが多くあるように見受けられます。そのような中でファイバーアートの新しい分野にも触れました。

世界を展望してみますと、テキスタイルの分野もデザインとアートの領域がクロスオーバーしてきたように思えます。このような動向の中で企画された「FIBER FUTURES-Japan's Textile Pioneer」展や「CONTEMPORARY FIBER ART MINIATUR E」展は日本にいる私達にとって大きな魅力であり刺激となりました。

この両方の展覧会とも海外からの要請により日本で企画することになりましたが、日本においてコンペティション方式で選出されることになりました。前者は大きい作品で、最終的に選出されたのは30作品で審査委員は現代美術評論家の建昌貴氏(元国立国際美術館長、ベニスビエンナーレや横浜トリエンナーレをキュレートされた)、アートディレクターの北川フラム氏(越後妻有アートトリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭や多くのアートイベントを企画)、ジョー・アール氏(元アメリカボストンミュージアム東洋部長、元ニューヨークジャパンソサエティギャラリーディレクター)等が担当されました。

FIBER FUTURES 展はニューヨークで立ち上げ好評を得てよりサンフランシスコ展を経てヨーロッパに渡りフィンランド、デンマーク、スペイン、ポルトガル、スウェーデン、フランス等を巡回展し、2015年5月〜7月パリの日本文化会館にて開催されましたが10月にはオランダで開催されます。嬉しいことに、それぞれの地で高い評価を受けました。ミニチュール展の方は20×20×20cm以内の小作品50点ですがこれもスロバキアを出発点にリトアニア、オーストリア、今年2015年3月にはスペインのサラマンカ大学付属 西日文化センター、通称 美智子皇后のホールと称されるゆかりの会場で展示されました。今後ヨーロッパ、アメリカ等で巡回される予定になっています。この展覧会も高い評価を得ています。展覧会と同時に日本の文化を紹介するイベントやレクチャー、ワークショップなども企画し各地で交流活動をしています。本当にグローバルエーションの世界には国境が無く、人間の心と心の絆を繋げることが出来ることを美感として体験しました。